山根安太郎先生著書・論文等目録

一　著書・編書

模範作文（三冊）
（ほかに、教師用指導書三冊）
（清水治郎・広幸亮三・満窪鉄夫と共編）　昭和九年　修文館

新選漢文読本（五冊）
（〃）　昭和一〇年　〃
（〃）

漢文（五冊）
（〃）　昭和一二年九月　〃
（〃）

新作文（三冊）
（〃）　昭和一一年一二月　〃
（〃）

女子新作文（三冊）
（〃）　昭和一二年　〃
（〃）

女子模範文集（一冊）
（〃）　昭和一二年　〃
（〃）

新制漢文（四冊）
（〃）　昭和一二年九月　〃
（〃）

新制国語（一〇冊）
（〃）　昭和一三年八月　〃
（〃）

日本精神の顕揚と国語教育
（「日本精神の教育」中の一編）
（岡本恒治らと合著）　昭和一五年　京極書店

国語講読指導過程の研究
（「中等教育における各科教授法の研究」中の一編）
（尾野作治郎らと合著）　昭和一五年　〃

国民科概説
（「新制中等学校教科教授の実践的研究」中の一編）

（河野通匡らと合著）　昭和一九年五月　〃

作文・話方教授
（〃）　〃
（〃）　〃

私たちの国語新事典（昭和二七年三月改訂版）　昭和二五年六月　学習書房

良い子の国語（一三冊）
（ほかに、教師用指導書六冊）
（長田新・金子金治郎らと編著）　昭和二七年六月　広島図書

新編国語（六冊）
（〃）（昭和三一年三月改訂）
（岡本明・金子金治郎・真下三郎・野地潤家らと編著）　昭和二八年一月　大阪教育図書

新編古文（三冊）
（〃）　昭和三一年三月　〃

文法教育の範囲と系統
（資料提供）
（石井庄司らと合著）　昭和三四年一一月　明治図書

二　論文・雑筆

国民性の涵養と国語教育　「中等教育の実際」　昭和八年一〇月　広島高師付中中等教育研究会

文と語の相関性と解釈　「国文学攷」　昭和一一年九月　広島文理大学国語国文学研究室

言葉による心の陶冶　「中等教育の実際」　昭和一一年一一月　広島高師付中中等教育研究会

富士谷御杖の思惟とその態度　「国民精神文化」　昭和一二年六月　国民精神文化研究所

国語講説指導過程の研究　「中等教育の実際」　昭和一四年　広島高師付中中等教育研究会

話言葉の文化とその教育　「文学探究」　昭和二三年八月　いつくし文庫

庶務記録抄　「広島国語国文学会研究紀要」　昭和二七年一月　広島国語国文学会

国語教育地図（広島県の巻）　「教育技術」　昭和三〇年八月　小学館

言語道具観を止揚せよ　「中等国語」　昭和三一年三月　〃

研究会の発表について　「広島大学国語国文学会会報2」　昭和三三年三月　広大国語国文学会

明治初期国語教科書の性格――漢用教科書の一群――　「国文学攷」　昭和三三年一一月　広大国語国文学会

「学制」期における国語教育の構想――教則の変遷と教材の示すもの――　「広島大学教育学部紀要（第一部）」　昭和三四年三月　広大教育学部

明治初期における国語教育の方法――「学制」期における様相――　「教育学研究紀要」　昭和三四年六月　日本教育学会中国四国支部会

国語教育研究めぐり（広島県）　「日本国語教育学会誌」　昭和三四年七月　日本国語教育学会

「国語」科の成立——国語教育史上の一画期——	「土井忠生先生還暦記念論文集（国文学攷）」	昭和三五年三月	広大国語国文学会
「国語」科の胎生——初期「国語」科観の形成——	「国語科教育」	昭和三五年四月	全国大学国語教育学会
寒暖	「かんつばき」	昭和三六年二月	
春愁	「春雷」	昭和三六年五月	
万葉ところどころ	「〃」	昭和三六年一一月	
師範教式の成立	「斎藤清衛先生古稀記念特集（国文学攷）」	昭和三七年五月	広大国語国文学会
柿蔭山房の雨	「春雷」	昭和三七年一一月	

山根安太郎先生略年譜

明治三十六年　（当歳）
二月九日　山根長次郎・まつのの二男として、鳥取県東伯郡赤崎町高岡一七一に生まれる。
明治四十二年　（六歳）
四月　東伯郡以西尋常小学校（当時）に入学。複式三学級の小学校。
大正四年　（十二歳）
三月　同校卒業。在学中、畿谷小波の世界お伽噺の類、少年世界・日本少年などの雑誌類を耽読没頭。
大正四年　（十二歳）
四月　東伯郡赤崎町船山高等小学校入学。近郷数か町村組合立の高等小学校で施設やや完備、担任中原富蔵先生の薫化深大。
大正六年　（十四歳）
三月　同校卒業。この間、師範学校入学を志望してはたさず、私立中学編入、自村役場書記勤務、上京、陸軍某学校に入学して病気退学、療養など、蹉跌曲折を経た。
大正十二年　（二十一歳）
四月　鳥取県師範学校本科第二部入学。試験検定で中学全科目の試験を受けた。国語科担当酒井福蔵先生の感化を受けた。
大正十三年　（二十一歳）
三月　同校卒業。四月、鳥取県東伯郡上中山尋常高等小学校訓導。高原の小学校で青年教師の第一歩をふみだし、独歩の小説のような体験をえた。
大正十四年　（二十二歳）
四月　広島高等師範学校文科第一部入学。「小学校令施行規則第百二十六条第三号ニ依リ休職を命ス　鳥取県」という辞令を受けて、休職のままの進学。晩学生で同年齢のものも三・四いた。いわゆる上海本で、無点白文の漢籍をたたきこまれたり、一年からの専門学科に目を白黒し、ここで、一生の方向を決定づけられた。国文学の鈴木敏也・斎藤清衛先生、漢文学の北村沢吉先生、倫理の西晋一郎先生などの感化で、人間としての骨髄を形成された。
昭和四年　（二十六歳）
三月　同校卒業。四月「広島高等師範学校ニ奉職スヘシ　文部省」という辞令をもらって、付属中学校に就任。当時、助教諭。官立学校では判任官で「助」の字をつけ、七・八年でこの字がのくと、高等官六等くらいで、堂々たるもの。友人のたれかれは、新設の文理大に進み、学究の道を行くのがうらやましく、さりとて、病臥

三年余の兄と、幼弱の弟とある身では、父母の心使いが思われ、進学断念。付中では、さっそく新一年の級担任。これより付中勤続十五年、教授法と教材の研究をみっちりたたきこまれた。

昭和七年　（二十九歳）

三月　大村キヨコと結婚。広島に家をなす。

昭和十一年　（三十三歳）

十月　官命で上京、半年間国民精神文化研究所入所。「日本精神」の紀平正美博士らの「大正育ちの自由人を洗脳させる」硬教育に迷いながら、久松潜一博士・志田延義氏らの講義にある種の救いをえた。

昭和十二年　（三十四歳）

三月　任広島高等師範学校教諭、叙高等官七等。

昭和十六年　（三十八歳）

九月　兼任広島高等師範学校講師（国語）。一週二時間くらいの講義。平家物語・謡曲・竹取物語など。いつごろからか、「国語教育法」をも講じた。（十九年三月まで）

昭和十九年　（四十一歳）

四月　任広島高等師範学校教授。終戦まで一年余。授業はしだいになくなり、学徒動員につき添うて、三菱機械などに出動、学徒特別輸送隊付となって、諸工場にトラックで飛びまわった。

昭和二十年　（四十二歳）

八月　終戦。広島市内牛田で単身被爆、上半身火傷。半死半生で帰郷療養半歳余。文理大・高師は灰燼。

昭和二十一年　（四十三歳）

二月　広島県安芸郡乃美尾村海軍医務学校跡に疎開開校。身体なお不調ながら出校。校内宿泊。教材は筆写させて授業。物みなとぼしく、山ざいの赤土の校庭を耕して、教官おのおの甘藷づくりをした。

昭和二十一年　（四十三歳）

十月　公職追放の審査きびしく、当時、精細な調査書を出して、左のような適格判定書を受けた。

第三八五号　判定書

住所　広島市翠町一一〇八ノ九

職名　文部教官広島高等師範学校教授

山根安太郎

明治三十六年二月九日生

右の者は昭和二十一年勅令第二百六十三号の規定によって提出した書面を審査したところ昭和二十年十月二十二日附聯合国最高司令官覚書日本教育制度ニ関スル管理政策、同月三十日附同教員及教育機関係官ノ調査、除外、認可ニ関スル件及昭和二十一年一月四日附同公務従事ニ適セザル者ノ公職ヨリノ除外ニ関スル件に挙げてある条項は当らない者であると判定する

昭和二十一年十月十五日

中国地区学校集団教員適格審査委員長　同

昭和二十二年　（四十四歳）

四月　家族郷里の疎開先より広島復帰。「闇買い」のことば、むやみに恐ろしく、いなかの実家から米一升を運んで、汽車中でとらえられ、広島駅前の交番に運行されたりした。

昭和二十二年　（四十四歳）

四月　広島高師は、乃美尾村から引きあげ、十月、市内出汐町旧

陸軍被服廠跡で授業。陰湿な倉庫内で、昼も電燈をつけた。

昭和二十四年　（四十六歳）

六月　新制広島大学発足。広島高師は広大教育学部に改組。新制参加にスタッフ大混乱。

昭和二十七年　（四十九歳）

三月　広島高等師範学校廃校。これにともない、本官教育学部東千田高等学校教諭、兼官教育学部助教授。

昭和二十七年　（四十九歳）

十月　任広島大学助教授。教育学部勤務。今日まで高師教授と兼務のままで、野地潤家助教授とともに、広大教育学部高等学校教育（および中学校教育）科国語専攻の教育方針・教育課程の設定に、連年苦労した。

昭和三十一年　（五十三歳）

四月　教育学部東雲分校に配置がえとなり、主として小・中学課程の国文学・国語教育法・国語教材研究担当。

昭和三十一年　（五十三歳）

十一月　長男克彦死。失意流浪。

昭和三十六年　（五十八歳）

二月　任広島大学教授。